

## 十字軍時代のシリア

### ——十字軍研究の動向とシリア史の課題

中村 妙子

#### 一 十字軍の始まりとシリア

一〇九五年十一月、ローマ教皇ウルバヌス二世がフランス東部クレルモンの特設野外会場で行った十字軍勸説に呼応して、翌一〇九六年、第一回十字軍が西欧各地から聖地エルサレムをめざして出発した。十字軍はビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルで集結したのち、アナトリアを経由してシリアに向かった<sup>(1)</sup>。十字軍の出現について、シリア中央部のダマスカスに居住していた歴史家イブン・アルカラニシーは、一〇九七年の記事で「コンスタンティノープルの海の方から夥しい数のフランク（十字軍）の軍隊が現れたという報告が続々と届いていた。この情報が広まり、人々は不安に陥った<sup>(2)</sup>」という書き出しで、アナトリアでの十字軍とルーム・セルジューク朝との戦いの状況を記し、さらに「ルーム・セルジューク朝が七月に敗北したという報告が届くと、不安と混乱が増加した」と記している。またシリア北部のアレクポに住んでいたアズイーミーは、より早く情報を得ていて、これより前「一〇九六年、フランクが自領から現れた。…（略）…ルーム王（ビザンツ皇帝）アルカス（アレクシウス一世）はムスリムにフランクの出現を知らせる手紙をよこし

た」<sup>③</sup>と十字軍とビザンツ帝国が必ずしも一枚岩ではないことを示唆している。

ローマ教皇ウルバヌス二世が十字軍勸説を決意した直接のきっかけは、アナトリアのルーム・セルジューク朝に対する防衛に苦しむビザンツ皇帝アレクシウス一世からの援軍要請であったと言われている。しかし、初期キリスト教に忠実であったビザンツ帝国にとつて、イスラーム世界との戦いは聖戦という性格を帯びたものではなく、あくまでも領土を接する異教徒の隣国との戦いであった。<sup>④</sup>したがって、アレクシウス一世は、単に軍事力を補うための傭兵を必要としただけで、軍隊の介入を頼んだわけでも、ましてや聖地奪回のための十字軍の組織を依頼したわけでもなかった。ローマ帝国以来の伝統を誇るビザンツ帝国は、西欧に対して常に優越感や不信感を持っていた。アレクシウス一世の娘、アンナ・コムネナは父帝アレクシウスの事跡の記録『アレクシアド』<sup>⑤</sup>の中で、自らの帝国を「ローマ」と呼び、十字軍については西欧人一般を表す「フランク」と総称して呼んでいた。シリアのムスリムもビザンツ帝国での呼び方に倣い、ビザンツ帝国を「ルーム」(ローマ)、西欧から侵入してきた同じキリスト教徒の武装集団(十字軍)を「フランク」と呼んで区別していた。一〇九七年にシリアに到着した十字軍は一時的な軍事遠征ではなく、翌一〇九八年から、ラテン国家と称される四つの領域国家(エデッサ伯国、アンティオキア公国、エルサレム王国、トリポリ伯国)を順次建設した。以後、一二九一年に十字軍最後の拠点アッコン(アッカー)が陥落するまでの約二〇〇年間、シリアでは、イスラーム国家とキリスト教国家とが、その境界を移動させながらも、常時対峙することになったのである。

しかし、「十字軍」という言葉は同時代には使われておらず、後世になって作られた述語である。西欧中世の史料では、十字軍のことを「エルサレム巡礼」とか「聖墓もうで」と呼ぶことが多く、自らを、西欧人一般を示す「フランク」と呼び、シリアに定着した十字軍勢力については個別のラテン国家名や地名、人名で呼んでいたのである。十字軍参加者は十字の印をつけることが多かったことから、のちの研究の中でこの軍事的宗教遠征を十字軍と呼ぶようになった。「十字軍」の用語の初出は一三世紀であるが、一五世紀以降の西欧の研究の中で用いられ始め、一七世紀には頻繁に用いられ

るようになる。

一方のシリアは、さまざまな系譜の軍人政権が分立する状態にあった。これらの政権は、十字軍遠征の宗教的意図を理解しておらず、西欧から来たこのキリスト教徒の武装集団に対して、キリスト教徒 *nasrani* の語を用いず、前述のように、たんに西欧人一般を表す *Frank* (*franj*) と呼び、戦闘を交わすこともあれば、和平や同盟の関係を結ぶこともあった。アラビア語の「十字軍 *ṣalḥiyyūn* (十字を身につけた人々)」という用語が用いられるようになるのは、西欧での研究と連動した現代に入ってからである。

## 二 十字軍研究の潮流

西欧における十字軍についての研究は、前述のように一五世紀以降次第に始められた。東方の聖地を回復しようとする動きの中で、聖地での記録や聖地回復への情熱を著すものであったが、その記述はそれぞれの時代の思想背景に左右された。一九世紀になると、中世キリスト教に対する関心が復活するのに伴い、十字軍の意味に注目が集まり、ラテン国家における十字軍の詳細な記録が多く編まれた。同時に諸言語の史料が集められたが、ラテン語・ギリシア語だけでなく、植民地時代を反映して、アラビア語などの東方の諸言語の史料のフランス語訳の作業が行われたのが一九世紀後半のことである。このような研究の成果を駆使して、二〇世紀には具体的かつ総合的な十字軍史が著された。一九五五年に全五巻の予定で刊行が開始された、*K. M. Setton* を編者とするペンシルヴァニア大学の共同研究による十字軍史は、その代表的なものである。第二巻まで刊行された後、全六巻の構成に変更され、約二〇年かけて完結した ([Setton ed.: 1969-89])。現在では、詳細な事件史の集成という批判はあるものの、むしろそこに手引書としての価値が見出されている。こののち、聖地への十字軍運動を重要視する立場（「伝統主義」）をとるそれまでの十字軍研究<sup>6)</sup>に対して、一九七〇年代から新たな考

え方が始まった。ローマ教皇の主導権を強調し、十字軍運動を広く解釈する（「多元主義」）ものである。地域的には東方への遠征に限らず、スペイン・バルト海地域・北アフリカ、さらに西欧内部にも十字軍概念が広げられた。それは十字軍運動の性格を広く教会に敵対する俗権へ向けた聖戦と捉えることで補強され、従って年代的にも、一〇九五年に始まった十字軍運動は、理論的には聖ヨハネ修道騎士団がマルタ島をナポレオンに明け渡した一七九八年まで続いたことになる。この考え方の中心となったRiley-Smithによる[Riley-Smith: 1977]は、現在四版を重ねている。このような十字軍概念の拡大に伴って、聖地奪還の意義が相対的に薄れ、一九八〇年代からは、十字軍研究には、十字軍運動の基本理念についての研究と、それぞれの地域と十字軍の関わり方の研究へと分化する傾向が見られるようになった。

### 三 最近の十字軍研究の動き

一九九五年は、クレルモン十字軍勸説から九〇〇年の節目にあたり、その後の数年間は、ヨーロッパ各地で第一回十字軍関連の記念シンポジウムが開かれ、また十字軍に関する論考も多数刊行された。さらに二一世紀に入ると、二〇〇一年九月一日の同時多発テロ事件をきっかけに十字軍と現代の紛争とを結びつける風潮が広まり、特に欧米において十字軍への社会的関心が高まった。そのため一般向けの十字軍物語が数多く出版されるようになったが、これと並行して、十字軍運動についての学術的な論考もさまざまな角度から大量に刊行されることとなった。以下に、その傾向ごとに紹介していきたい。

#### (1) 初学者向けの概説書

一般向けの十字軍物語から専門書まで、洪水のような十字軍関連の出版物の中で求められているのが、初学者向けの概

説書や手引書である。[Jotischky : 2004] は、通史であるが、著者の専門領域である修道院について詳しい。[Jotischky ed. : 2008] は、古今の第一線の研究者の既発表論文をテーマ別に転載・編集した四巻本である。

[Riley-Smith ed. : 1995] は図解入りの入門書で、騎士団やイスラームとの関係を含み、文学・美術・建築も取り上げている。[Hillenbrand : 1999] は、イスラームの視点からの十字軍史で、図版を多用しながら註や参考文献も充実している。

## (2) 基本文献の再版・改訂版

一九〇〇年代後半に刊行された論考の再版・改訂版などが相次いだのも、この二〇年間の大きな特徴であるが、ここでは十字軍研究の大きな流れを築いた二者の紹介に留める。「多元主義」学派の代表的な研究者である Riley-Smith による [Riley-Smith : 1977] や [Riley-Smith : 1986] は、二〇〇九年にそれぞれ第四版、改訂版が出されている。ともに最新の研究動向の紹介や地図の追加が充実している。これに対して、「伝統主義」学派に属する J. Richard は [Richard, J. : 1957] に文献目録を追加して二〇〇〇年に第二版を出版し、二〇〇四年の日本語訳の序文で、二一世紀の宗教間の対立に十字軍運動が利用されていることを憂慮し、十字軍運動の研究の原点に帰るべきであることを述べている。

## (3) 論文集

論文集には多角的な研究を網羅することができる利点がある。[Bull/Hously eds. : 2003] と [Edbury/Phillips eds. : 2003] の二巻本は、Riley-Smith の生誕六五周年記念論集で、合計三四編の構成である。また [Shagrir/Ellenblum/Riley-Smith eds. : 2007] は Benjamin Z. Kedar の研究論文出版四〇周年を記念した論文集で、冒頭に Kedar の著作一覧を載せ、三二編の論文が収められている。[Laou/Mottahedeh eds. : 2001] は十字軍運動をビザンツ帝国やイスラーム世界から考察するものである。「東地中海」の視点も多く見られ、[Ciggaar/Mercalf eds. : 2006] は「中世の東地中海」の一角としての

アンテイオキアに焦点を当てた二三編の論文を収め、[Behnammer/Parani/Schabel eds.: 2008]は東地中海の外交を扱う論文二〇編を収めている。また [Lev ed.: 1997]は、中世の東地中海地域の軍事と社会の相互作用を一四編の論文から描いている。[Christie/Yazigi eds.: 2006]は一一編の論文からなり、中世社会の軍事を、西欧・ビザンツ帝国・イスラーム世界の三つの地域を対象にして、実際の軍事行動とその論理を検討している。

#### (4) 一次史料の翻訳

D. S. Richard はイブン・アルアスィール著のアラビア語年代記『完史』の英語訳を著した。すなわち [Richard, D. S. tr.: 2002] はセルジューク朝の治世に該当する部分の抄訳と解説で、[Richard, D. S. tr.: 2006-2008] は、十字軍時代に該当する部分を英訳し解説をつけたものである。イブン・シャッタードの手になるサラーフ・アッデインの伝記の英訳と解説が [Richard, D. S. tr.: 2001] である。D. S. Richard による英訳全てにおいて、アラビア語底本との照合が可能となるようページ番号の記入が行われている。[Mourad/Lindsay: 2013] は、十字軍時代のジハード理論を支えたとされるダマスクスのハディース学者イブン・アルアサーキルによる『ジハードに誘う四〇のハディース』の英語訳を、時代背景やスンナ派法学についての詳細な解説とともに著したものである。また十字軍時代初期のダマスクスの法学者スラミーのジハード論は、これまで部分訳があるのみであったが、[Christie: 2015] は、現存するテキストの初の全訳（英語）である。

#### (5) ジハード論・軍事・外交と十字軍

[Firestone: 1999] と [Bonner: 2006] は、イスラーム世界におけるジハードの論理をクルアーンから説きおこした。特に後者は、ジハードは複雑な論理の組み合わせで、時代によって変化していることを強調している。[France: 1999] は、地域と年代の幅を広くとって十字軍時代の戦争について分析しているが、時系列ではなく、戦術・武器・軍隊・要

塞・指揮系統・社会状況などの切り口から軍状況全般が見通せる構成となっている。これに対し [Tribble : 2018] は、年代を一一八七年のヒティーンの戦いまでに絞り、十字軍とムスリムの軍事展開を詳述したもので、近年の考古学的成果も駆使している。一方、ラテン国家の定着に伴って十字軍とムスリムの対峙状態が常態化したシリアでは、現実的な問題として外交的な共存が行われていた。[Köhler : 2013] は、ドイツ語で書かれた [Köhler : 1991] の外交関係の論証の英訳である。[Friedman : 2002] は、捕虜の身代金の問題を取り上げ、軍事と外交を分析している。[Holt : 2004] は、早くから十字軍とムスリムの外交関係を研究してきた著者の集大成とも言える著作である。

#### (6) 考古学・建築学の成果を用いたアプローチ

近年、建築学や考古学的な考察が歴史研究に積極的に取り入れられるようになった。[Kennedy : 1994] は十字軍の城を取り上げ、歴史学と建築学を融合させた。R. Ellenblum は、[Ellenblum : 1998] で、考古学の情報を用いて、支配領域の農村地帯の再現を試み、十字軍が入植・定着してエルサレム王国を形成していく過程を考察して、[Ellenblum : 2007] で、さらに城の役割について検証を加えている。

#### (7) ビザンツ・シリアにおける十字軍史

[Laiou : 2012] は、ビザンツ史を専門とする Angeliki Laiou の一九八二年からの既発表論文をテーマごとに集めたもので、十字軍を含む「他者」との関係を政治、経済など多方面から論じている。[Harris : 2003] は、十字軍とビザンツ帝国の關係に焦点を合わせている。ビザンツ帝国とイスラーム勢力とラテン国家の間に位置し、政治的にも宗教的にも揺れの大きかったアルメニア王国についての研究が [Ghazarian : 2000] である。エルサレムについては、歴史学的文献と考古学の成果を融合させた研究として、都市としての面に焦点をあわせたものが [Boas : 2001] であり、在地のキリスト教徒



を十字軍が支配するという構図が生じた領域国家としての検証を行ったのが、前述の [Ellenblum : 1998] である。[Macevitt : 2008] は、宗派を異にする在地のキリスト教徒との関係の検証範囲を全ラテン国家に広げている。北辺でビザンツ帝国と近接していたアンティオキア公国の複雑な状況を分析しているのが [Asbridge : 2000] である。シリア中部の都市シャイザルの要塞の発掘調査報告に歴史的背景を加えたものが [Tonghini and others : 2012] や [France ed. : 2018] は、聖地十字軍最後の砦となったアッコン（アッカー）についての総合的研究である。

#### 四 十字軍時代のシリア史研究の課題

近年の十字軍研究は極めて多面的で、常に新たな視点が生まれている。しかし十字軍が西欧から発せられたものである以上、そこには「西欧からの目」の存在があり、シリア史の中の十字軍時代を研究するには、西欧の十字軍研究とは異なった視点が必要となる。

西欧の十字軍研究においても「イスラームあるいはアラブの視点から」というアプローチはある。Francesco Gabrieli は、アラブの歴史家の著作の抄訳を時系列で構成し、シリアにおける十字軍の歴史を通史的にまとめた ([Gabrieli : 1969])。一九五七年版のイタリア語原著の刊行に際して、Gabrieli はこの著作の目的を「そのとき敵であった人々の目と心を通して、もう一方の側から見た十字軍」を提供することであると述べている。しかし、この形式は二つの問題点を含んでいる。一つは、「十字軍」と「反十字軍」という裏返しの構図を招きかねないことである。ことに一般書においては、両者の対立構図を強調する出版物が見られることに注意が必要である。もう一つの問題点は、当時のシリアが政治的にも経済的にも文化的にも単一ではなかったことが捨象されてしまう恐れのあることである。視点をイスラーム側の史料に置く [Hillenbrand : 1999] は、通史は全体の半量にとどめ、後半は軍事・建築物・貨幣・文学作品などのトピックで構成されている。しかし、イ



スラームというくくりを前提としている分析からは内容が広範囲であっても、十字軍時代のシリアの多様性は見えてこない。シリアにとって十字軍は、ある日突然やってきた存在で、十字軍は、そこに「存在がある」「武力がある」「経済がある」そして「境界が移動する」ものであったのである。約二〇〇年間、十字軍とシリアのムスリムの間には常時戦闘が行われていたわけではなかった。十字軍にとってもムスリムにとっても領域国家の維持のためには、生活の糧の獲得というレベルからの「経済」が最優先であった。「武力」を用いた戦闘はむしろ、その「経済」の優位の確保のためであり、その領土は固定していたのではなく、「境界」は絶えず動いていた点に注目しなければならない。十字軍侵攻時のシリアには、四つのラテン国家、分立するイスラームの諸都市、これに介入するビザンツ帝国、セルジューク朝など、それぞれ利害の異なる数多くの政治勢力が存在した。「十字軍」という総体はなく、四つのラテン国家はそれぞれが別経営であり、イスラーム諸都市との交渉も各々が個別に行っていた。そしてそこには、その数だけ「移動する境界」があったのである。一方、アラブ側からのシリア研究は、歴史、ジハード論を含む思想、詩を中心とする文学など幅広い分野に数多くある。ラテン国家建設に記述の重点が置かれた十字軍側の史料に比べて、いわば社会の変化を余儀なくされた側であるアラブ側史料は、十字軍侵攻によって起こったシリアの社会構造の変化についてより具体的な記述を持っている。アラブ側史料に基づくシリア研究は、十字軍とシリアを二項対立で捉えるのではなく、シリアという土地に同時に「存在した」それぞれの勢力として分析することを可能とするであろう。

最近、十字軍時代のシリアの王朝の通史が刊行された。[Peacock: 2015]はセルジューク朝、[Peacock/Yildiz eds.: 2012]はルーム・セルジューク朝の通史である。セルジューク朝が一一世紀末に内紛のために急速に衰えた結果、シリア各地では在地の領主がセルジューク朝の宗主権のもとに、それぞれの領域を実質的に統治するようになった。シリアに十字軍が入ってきたのはこのような時であった。セルジューク朝はアッバース朝カリフの権威のもとにあったので、シリアの諸都市は、名目的とはいえ、アッバース朝カリフ、セルジューク朝スルタンのもとの、いわば三重構造の最下部にあっ

たのである。一方、このセルジューク朝の王族の一部がアナトリアに進出して建てたのがルーム・セルジューク朝である。アナトリアが「ルームの地（ビザンツ帝国の領域）」と呼ばれていたことがこの呼称の由来であり、この王朝がアナトリアで境界を接するビザンツ帝国と争ったことが、第一回十字軍のきっかけとなったのである。通史という性質上、一筋縄ではないこの時代の複雑な様相を浮かび上がらせることは難しいが、王朝としての政治システムなど、有益な情報を提供している。

最後に、二〇〇〇年以降に出版された翻訳を含む日本語の文献を紹介したい。[宮松：2004]は前述の[Richard, J.: 1957]の邦訳で、巻末に訳者によって十字軍研究史がまとめられている。[森田：2013]は[Jotischky：2004]の邦訳である。概説書であるが、歴史学の方法論などについての議論も展開されている。ラテン語（中世ラテン語）史料の日本語への翻訳が[丑田：2008]である。第一回十字軍に実際に参加した年代記作家が著述した三つの年代記を取り上げている。巻末に訳者による的を射た解説がつけられているので、初学者にも取り組みやすい。[八塚：2008]は著者の長年にわたる十字軍研究の成果を一般向けに書き下ろした実証的な概説書である。巻末の日本語文献目録は詳細で利用価値が高い。また、[櫻井：2019]は十字軍のもつ宗教性のみならず、西欧の複雑で混沌とした政治状況と十字軍国家の変遷との関係について複合的に描いている。さらに、研究動向案内としては[佐藤／池上／高山編：2005]所収の、櫻井康人による「十字軍運動」の項目(pp.118-122；文献一覧 pp.343-345)が簡潔でありながら、有益である。十字軍研究における日本語の文献は必ずしも全範囲を網羅するもののみではなく、欧文献の参照は必須であるが、研究の糸口としての価値は大きい。

#### 参考文献

- Asbridge, Thomas S. [2000] *The Creation of the Principality of Antioch 1098-1130*, Woodbridge.  
Beliammer, Alexander D./Parani, Maria G./Schabel, Christopher D. eds. [2008] *Diplomatics in the Eastern Mediterranean 1000-1500: Aspects of Cross-Cultural Communication*, Leiden.

- Boas, Adrian J. [2001] *Jerusalem in the Time of the Crusades : Society, landscape and art in the Holy City under Frankish rule*, New York.
- Bonner, Michael [2006] *Jihad in Islamic History : Doctrines and Practice*, Princeton.
- Bull, Marcus /Hously, Norman eds. [2003] *The Experience of Crusading : Western Approaches*, Cambridge.
- Christie, Niall /Yazigi, Maya eds. [2006] *Noble Ideals and Bloody Realities : Warfare in the Middle Ages*, Leiden.
- Christie, Niall [2015] *The Book of the Jihad of 'Alī Ibn Tahir al-Sulami*, 1106) : Text, Translation and Commentary, Farnham.
- Ciğear Krijnie N. /Metcalf, D.M. eds. [2006] *East and West in the Medieval Eastern Mediterranean : Antioch from the Byzantine Reconquest until the End of the Crusader Principality*, Leuven.
- Edbury, Peter /Phillips, Jonathan eds. [2003] *The Experience of Crusading : Defining the Crusader Kingdom*, Cambridge.
- Ellenblum, Ronnie [1998] *Frankish Rural Settlement in the Latin Kingdom of Jerusalem*, Cambridge.
- [2007] *Crusader Castles and Modern Histories*, Cambridge.
- Firestone, Reuven [1999] *Jihād : The Origin of Holy War in Islam*, Oxford.
- France, John [1999] *Western warfare in the age of the Crusades, 1000-1300*, London.
- ed. [2018] *Acre and Its Falls : Studies in the History of a Crusader City*, Leiden.
- Friedman, Yvonne [2002] *Encounter between enemies : captivity and ransom in the Latin Kingdom of Jerusalem*, Leiden.
- Gabriel, Francesco [1969] *Arab Historians of the Crusades*, E. J. Costello tr., Berkeley.
- Ghazarian, Jacob G. [2000] *The Armenian Kingdom in Cilicia during the Crusades : The Integration of Cilician Armenians with the Latins 1080-1393*, Richmond.
- Harris, Jonathan [2003] *Byzantium and the Crusades*, London.
- Hillenbrand, Carole [1999] *The Crusades : Islamic Perspectives*, Edinburgh.
- Holt, P. M. [2004] *The Crusader States and Their Neighbours, 1098-1291*, Pearson.
- Kennedy, Hugh [1994] *Crusader Castles*, Cambridge.
- Köhler, Michael [1991] *Allianzen und Verträge zwischen fränkischen und islamischen Herrschern im Vorderen Orient*, Berlin.
- [2013] *Alliance and treaties between Frankish and Muslim rulers in the Middle East : cross-cultural diplomacy in the period of the Crusades*, Leiden.

- Jotischky, Andrew [2004] *Crusading and the Crusader States*, London. (森田安一訳『十字軍の歴史』刀水書房、2013.)
- ed. [2008] *The Crusades*, 4 vols, London.
- Laïou, Angeliki E. [2012] *Byzantium and the Other : Relations and Exchanges*, Farnham.
- Laïou, Angeliki E./Mottahedeh, Roy P. eds. [2001] *The Crusades from the Perspective of Byzantium and the Muslim world*, Washington D.C..
- Lev, Yacov ed. [1997] *War and society in the eastern Mediterranean, 7<sup>th</sup>-15<sup>th</sup> centuries*, Leiden.
- MacEvitt, Christopher [2008] *The Crusades and the Christian World of the East : Rough Tolerance*, London.
- Mourad, Suleiman A. Lindsay, James E. [2013] *The intensification and reorientation of Sunni jihad ideology in the Crusader period : Ibn 'Asākir of Damascus(1105-1176) and his age, with an edition and translation of Ibn 'Asākir's The forty hadiths for inciting jihad*, Leiden.
- Peacock, A.C.S. [2015] *The Great Seljuk Empire*, Edinburgh.
- Peacock, A.C.S./Yildiz, Sara Nur eds. [2012] *The Seljuks of Anatolia : Court and Society in the Medieval Middle East*, London.
- Richard, D. S. tr. [2001] *The Rare and Excellent History of Saladin by Bahā al-Dīn Ibn Shaddād*, Aldershot.
- tr. [2002] *The Annals of the Saljuq Turks : Selections from al-Kāmil fī'l-Tārīkh of 'Izz al-Dīn Ibn al-Athīr*, London.
- tr. [2006-2008] *The Chronicle of Ibn al-Athīr for the Crusading Period from al-Kāmil fī'l-Tārīkh*, 3 vols, Aldershot.
- Richard, Jean [1957] *L'esprit de la croisade*, Paris. (宮松浩壽訳『十字軍の精神』法政大学出版局、2004.)
- Riley-Smith, Jonathan [1977] *What were the Crusades ?*, London. (2009, 4th ed.)
- [1986] *The First Crusade and the idea of Crusading*, London. (2009, 2nd ed.)
- ed. [1995] *The Oxford Illustrated History of the Crusades*, Oxford.
- Shagrir, Iris/Ellenblum, Ronnie/Riley-Smith, Jonathan eds. [2007] *In Laudem Hierosolymitani : Studies in Crusades and Medieval Culture in Honour of Benjamin Z. Kedar*, Hampshire.
- Setton, Kenneth M. ed., [1969-89] *A History of the Crusades*, I-VI, Wisconsin.
- Tibble, Steve [2018] *The Crusader Armies 1099-1187*, London.
- Tonghini and others [2012] *Shayzar I : The Fortification of the Citadel*, Leiden.

丑田弘忍 [2008] レーモン・ダジール他、丑田弘忍訳『フランク人の事績…第一回十字軍年代記』鳥影社

櫻井康人 [2019] 『図説十字軍』 河出書房新社

佐藤彰一／池上俊一／高山博編 [2005] 『西洋中世史研究入門 増補改訂版』 名古屋大学出版会

宮松浩憲 [2004] ジャン・リシヤール、宮松浩憲訳『十字軍の精神』 法政大学出版局

森田安一 [2013] A. ジョティシユキ、森田安一訳『十字軍の歴史』 刀水書房

八塚春児 [2008] 『十字軍という聖戦…キリスト教世界の解放のための戦い』 日本放送出版協会

## 註

(1) 歴史的シリアは、現在のシリア、ヨルダン、レバノン、イスラエル、パレスティナとトルコの一部を含む地中海の東部沿岸地域をさす。

(2) Ibn al-Qalānīsī, *Ta'rikh Dimashq*, S. Zakkār ed, Damascus, 1983, p.218.

(3) Al-'Azīmī, *Ta'rikh Haleb*, I. Za'rūr ed, Damascus, 1984, p.358.

(4) キリスト教の「聖戦」概念は、中世の西欧において、ゲルマン国家の成立以降次第に現れ始め、九一一世紀に形成されていた。封建制の進展、外民族の侵入、叙任権闘争に象徴される教皇と在地勢力との対立などの内外の様々な要素から、教皇の下でのキリスト教世界の統一を図るために形作られた概念であった。これに対して、初期キ

リスト教時代の戦争は、宗教の介在しない、やむを得ない世俗的な戦争であった。ゲルマン民族の侵入の影響を受けず、その後の西欧の変化とは一線を画していたビザンツ帝国は、初期キリスト教に忠実にしたがっていたため「聖戦」という概念は持っていなかった。〔八塚：2008〕pp.79-90、山内進『十字軍の思想』筑摩書房、2003、pp.13-15.)

(5) Anna Comnena, *The Alexiad*, tr.by E. A. S. Daves, London, 1928.

(6) この「伝統主義」に立つ代表的な著作として、H. E. Mayer, *Geschichte der Kreuzzüge*, Stuttgart, 1965が挙げられる。

(お茶の水女子大学大学院博士後期課程平成一九年修了)